

原著

大学生のためのリメディアル英語教材の研究

執行 智子¹⁾・宅間 雅哉²⁾・大島 幸³⁾・
船田 まなみ⁴⁾・カレイラ松崎順子⁵⁾

Possible Use of a Digital EFL Resource for Young Children as Remedial Material for
Japanese University Students

Tomoko Shigyo¹⁾, Masaya Takuma²⁾, Sachi Oshima³⁾, Manami Funata⁴⁾
and Junko Matsuzaki Carreira⁵⁾

要 約

現在、中学校の段階で習得すべき語彙・文法が欠如していることにより、リメディアル教育を必要とする大学生が多数見受けられる。本研究では、早期英語教育で広く使用されている『Let's Go』4th Edition デジタル版を機能、内容、語彙の観点から分析し、リメディアルが必要な大学生に資する教材と成り得るかを検証した。機能については、全セクションで音声を提供されており、大学生が音を聞き文字を見ながら自主学習を進めることができることが分かった。内容については、早期英語教育教材ではあるが、大人向け教材と同様の汎用性が高いテーマを扱っており、大学生の興味関心にも即した教材と考えられる。また、中学校学習指導要領に規定されている文法事項をほとんど網羅しているのに加え、1000語・2000語レベルの頻出語彙が収録され、大学生が中学校既習事項を無理なく学び直せるよう構成されていた。以上より、本教材はリメディアルが必要な学生の英語力向上に資すると考えられる。

キーワード：リメディアル、大学生、自主学習、デジタル教材、中学校英語

1. はじめに

現在、大学生のなかには中学校英語で扱う語彙・文法が不足していることにより、授業内容についていけず、単位修得に困難をきたしている学生が多数見受けられる。実際、文部科学省が平成27年度、全国の国公私立大学776大学に対して行った調査

(2017)によると、531大学(約71%)が、補習授業や個別指導など、大学入学以前の既習内容に配慮した取り組み、すなわちリメディアル教育を実施している。牧野・平野(2014)が大学教員を対象に行った調査から、英語リメディアル教育においては「中学校3年間で学ぶ程度の英語力を定着させる」(p. 71)目標のもと、文法・語彙に最も力を入れて指導

1) 執行 智子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) shigyo-tomoko@tokyomirai.jp
 2) 宅間 雅哉 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University) takuma-masaya@tokyomirai.ac.jp
 3) 大島 幸 津田塾大学非常勤講師 (Tsuda University) s-oshiba@tsuda.ac.jp
 4) 船田まなみ 東京未来大学こども心理学部非常勤講師 (Tokyo Future University) mmiya.oki.cha.1205@gmail.com
 5) カレイラ松崎順子 東京経済大学現代法学部 (Tokyo Keizai University) carreira@tku.ac.jp

している傾向が明らかになった。英語の学力が低い学生に対し、小野（2008）は、米国ではリメディアル教育に ICT（Information and Communication Technology）が積極的に使用されてきたが、日本では十分な普及に至っていないことを指摘し、「高等教育の質を維持し、学生の学力を高めるためeラーニングの拡大は緊急の課題」（p. 1）と述べている。本研究では、早期英語教育で広く使用されているデジタル教材を取り上げ、リメディアルが必要な学生の英語力向上に資する教材と成り得るか検証する。

2. 先行研究

文部科学省調査によると、中学校卒業時に中学校卒業レベルとされる英語検定3級を取得済みの生徒は18.4%、仮に受験したら3級を取得できる見込みのある生徒は16.7%（文部科学省、2015）にとどまり、リメディアルを必要とする大学数は7割（文部科学省、2017）であるという。すなわち、中学卒業時、中学校の履修事項を習得している生徒は35.1%しかおらず、残りは履修事項が欠落したまま、高校・大学に進学していることになる。間中（2010）は、大学において「中学校の段階で身に付いているはずであろう基礎文法力が欠如している学生の多さ」（p. 21）を指摘しており、牧野・平野（2014）によれば、実際、多くの大学が、中学校3年間で学ぶ文法・語彙に最も力を入れて指導している。中学校学習指導要領に規定のとおり、中学校英語では、発音と文字（綴り）との関連付けや、頻出語彙、重要な文法事項を扱う。これら英語の基礎となる事項を未習得のまま、大学において英語力を向上させる困難さは想像に難くない。

デジタル教材が、学習者に音声・絵・文字を同時に提供することについては、これまで様々な効果が指摘されてきた。具体的に、デジタル教材には、学習者の理解（聞き取り）に役立つ（Plass et al., 1998; Jones, 2003; Oxford & Crookall, 1990）、情報を概念と結びつけるのに寄与する（Oxford & Crookall, 1990; Terrell, 1986）、学習者の心的表象

（mental representation）の構築の過程に大きく貢献する（Mueller, 1980）、記憶に残りやすい（Salomon, 1983）、語彙力を高める（執行, 2012）効果があるという。またZucker, Moody, & McKenna(2009)は、デジタル教材により、学習者は文字や文字列が容易に認識でき、音と文字の関係について知ることができると示唆している。

学習への動機づけや自律性に関しても、デジタル教材の有効性が指摘されている。カレイラの調査（2008）によると、保育士養成課程の学生は、「言語をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる」（p. 79）と回答しており、ビデオやDVDを使う英語学習スタイルを好む傾向にある。また、パク（2008）は、デジタル教科書は様々なレベルや学習者の興味に合わせた内容を掲載することができるという点で有用な教材であると述べている。Jones and Brown(2011)は、自ら選択したものを読む方が、読むことに対しての動機づけや読むこと自体への取り組みが高まると示唆しており、國吉他（2005）は、e-Learning教材を活用することが、基礎的な英語力を身に付けていない学生が自主的な学習を進められることを可能にするに指摘している。

これらの研究から、デジタル教材をリメディアル教育に使用することは、大学生の英語力、特に語彙力と自律性の向上に資するものと考えられる。

3. 本研究

3.1 本研究の目的

本研究では、子ども向けのデジタル教材の機能と内容を分析し、大学生のリメディアル英語教育に適したものであるかどうか調査することを目的とする。

3.2 分析対象

本研究ではEFL（English as a Foreign Language）環境での早期英語教育で広く使用されているOxford University Press社の『Let's Go』4th Editionデジタル版（2012）Book 1～Book 6を分析対象とする。

3.3 方法

Oxford University Press社『Let's Go』Book 1～Book 6のデジタル版の機能、特にBook 4～Book 6の機能と内容、および語彙レベルを分析した。

(1) 機能

カレイラ (2008) の調査結果に基づき、学生が言語を耳で聞くだけでなく目で見ながら学習することができるかどうかを検証するために、各セクションに音声と文字がついているかを調査した。

(2) 内容

文部科学省調査 (2017) や間中 (2010) の研究から、リメディアルが必要な大学生には、中学校程度の基礎文法力が欠如していることが考えられる。そこで、各unitのテーマの分析に加え、各sectionにおける言語の機能と文法事項について、文部科学省が平成20年3月改訂版中学校学習指導要領で規定している項目に沿って分析した。なお、既に新学習指導要領 (平成29年3月) が発表されているが平成20年度版を分析に用いるのは、現在の大学生が中学在学当時に履修した内容との整合性を担保しながら、リメディアル教育に適した教材であるかを検証するためである。

言語の機能は、学習指導要領「2 内容」のうち「(2) 言語活動の取り扱い」の「(ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること」の項目から、「言語の使用場面の例」および「言語の働きの例」を使用した。文法事項は、「(3) 言語材料」の「(1) の言語活動は、以下に示す言語材料の中から、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いて行わせる」のうち「エ 文法事項」を使用した。

(3) 語彙

牧野・平野 (2014) の調査から、多くの大学において、英語習熟度の低い学生に対し、中学校3年間で履修する程度の語彙指導に力を入れていることが分かった。中学校学習指導要領「3. 指導計画の作成と内容の取扱い」において「(1) オ 語、連語および慣用表現については、運用度の高いものを用い、

活用することを通して定着を図るようにすること」と規定されているとおり、中学校では運用度が高い語彙が扱われる。そこで、分析対象教材にどの程度の頻出語彙が含まれているかを調査するため、文章中の語彙を頻度レベルにより分類できるウェブサイト Compleat Lexical Tutor v.8.3 (Cobb, 2002) を用いて word level (frequency) を分析した。

3.4 分析対象教材の構成と機能

『Let's Go』Book 1～Book 6は、どのBookにおいても、「Let's Remember」から始まり、2つのunit毎に1つの「Review」からなる。本研究では「Let's Remember」と「Review」以外の、「Unit 1～8」を分析対象とする。各unitは、「Let's Talk」「Let's Learn」「Let's Learn More」「Let's Read」の4つのセクションで構成されている。

はじめに「Let's Talk」では、冒頭にunitのモデル会話が会話場面の絵と共に提示される。学習者は絵を見てcontextを理解し、音声を聞き英文を見ながらの発話練習が可能である。その後、モデル会話を応用するための語彙が練習できるようになっている。「Let's Talk」の最後にはchantがあり、モデル会話で学習した各sentenceのイントネーションの練習ができるようになっている。

次に「Let's Learn」では、「Let's Talk」とは逆に、会話に使用する語彙のInputから始まる。各語彙には絵と文字 (綴り) がついており、学習者は絵を見ながら語彙の意味を理解し、さらに文字と綴りを関連付けることが可能である。この語彙のInputを踏まえ、学習者は次に提示されるモデル会話を練習し、絵を見ながら自分自身で実際に文章を作る活動を行う。すなわち、冒頭の語彙のInputは学習者にとってPre-listeningおよびPre-speaking activityの役割を果たしていると考えられる。

「Let's Learn More」は、前セクション「Let's Learn」と同様の構成 (語彙のInputから会話練習をし、自分自身で文章を作る活動に至る) になっているが、「Let's Learn」との大きな違いは、さらに

発展させた会話表現を扱っている点にある。言い換えれば、「Let's Learn」セクション全体を踏まえ、学習者がより高いレベルの会話表現を実現できる（セクションの名のとおりLearn “More”する）ようStep upしていると言えよう。例えば、未来形を扱うBook 5 Unit 5では、「Let's Talk」にてYes/No questionである“Will Jenny mop the floor?—Yes, she will.”という会話を練習していたが、「Let's Learn More」では“What will you do after class?”という疑問詞を用いた表現にまで発展させている。

最後のセクションである「Let's Read」では、約

80語程度（下記3.5.3参照）のReadingの後、文章読解を確認するmultiple choice question、Reading中の1文を取り上げて文中の語彙理解を確認するクイズ等が出題される。最後に特筆すべき点として、Reading中に登場した単語に含まれるphonics (Book 1～6) と派生語 (Book 5および6) が掲載されている。

各セクションにおける音声がついている割合は、表1のとおりである。どのBookにも約50%以上、音声と文字がついていることが分かる。

表1 各セクションの音声と文字の割合

		1	2	3	4	5	6
Let's Talk	音声	67%	67%	100%	100%	100%	100%
	音声+文字	67%	67%	100%	100%	100%	100%
Let's Learn	音声	97%	100%	100%	100%	100%	97%
	音声+文字	48%	50%	50%	50%	44%	50%
Let's Learn More	音声	100%	100%	88%	90%	85%	86%
	音声+文字	50%	50%	25%	26%	30%	34%
Let's Read	音声	100%	100%	100%	100%	50%	50%
	音声+文字	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表2 『Let's Go』各Bookのテーマ

	Book 1	Book 2	Book 3
Unit 1	Things for School	At School	At School
Unit 2	Colors and Shapes	My Things	Clothing
Unit 3	At the Store	Things I Can Do	Places
Unit 4	People at Home	Occupations	Occupations
Unit 5	Happy Birthday!	Things to Eat	Activities
Unit 6	Outdoor	My House	What Time Is It?
Unit 7	Food	Routines	Food
Unit 8	Animals	Doing Things	Animals
	Book 4	Book 5	Book 6
Unit 1	The Great Outdoors	How Much Food?	School Days
Unit 2	Hopes and Dreams	Comparing Animals	At the Aquarium
Unit 3	Birthdays	Last Weekend	Going Shopping
Unit 4	School	Activities	Around Town
Unit 5	Outdoors and Indoors	The Future	Explore the World
Unit 6	People	Fun in the Seasons	Doing Things
Unit 7	Future Plans	The Senses	About Me
Unit 8	Work and Play	New Experiences	In the Future

3.5 分析対象教材の内容

3.5.1 テーマ

各Bookのテーマは表2のとおりである。

分析対象教材は児童を対象としている教材であるため、Book 1～Book 3は学校にcontextが設定されているunitが多くを占める。他方、Book 4～Book 6では、仕事、学習者が訪れるであろう場所（水

族館や戸外）、周囲の人との会話などのcontextに設定されているのに加え、現在・過去・現在完了（これまでの経験など）・未来について語る場面もある。大人の初級用テキスト『Smart CHOICE 1』および『English FIRTHAND 2』のテーマ（表3）と比較しても相違ないことから、Book 4～Book 6は大学生の教材としても適していると思われる。

表3 大人用communicationテキストテーマ

	『Smart CHOICE 1』(Oxford)	『English FIRTHAND 2』(Longman)
Unit 1	Nice to meet you!	Have you two met?
Unit 2	What do you do?	You must be excited!
Unit 3	Do you like spicy food?	Where should I go?
Unit 4	How often do you do yoga?	I love that!
Unit 5	What are you watching?	What's your excuse?
Unit 6	Where were you yesterday?	What's it like there?
Unit 7	Which one is cheaper?	Do you remember when...?
Unit 8	What's she like?	Let's have a party!
Unit 9	What can you do there?	What should I do?
Unit 10	Is there a bank near here?	Tell me a story.
Unit 11	Did you have a good time?	In my opinion...
Unit 12	I'm going to go by car.	It's my dream!

3.5.2 言語の働きと構造

分析対象教材のうち、上述のとおり大学生に適したテーマを扱っているBook 4～Book 6に収録されている全ての言語使用場面（計350箇所）、および全てのsentence（chants歌詞を除く全1,136文）がどのような場面で、どのような働きをしているかを分類し（表4）、さらに各sentenceの文法項目を分析した（表5）。

言語の使用場面においては、どのBookにおいても明確でない場面が多く（「分類不可」項目を筆者にて追加）、「b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面」であろうと推測されるが、分類項目に匹敵するものは少なかった。ただし教材の絵を参照すれば、学習者にとって、contextがわからないということはない。言語の働きでは、「質問」に対して「説明・描写」する会話調のものが大半を占める。

文法項目については、表5の通りであった。

「(ア) 文1」文の種類では、どのBookにおいても単文が大半を占めてはいるものの、Book 6では重文と複文で15%を占めている。これは、接続詞whenやthat節（例：I think that…）を用いた文が存在したためである。

「(ア) 文2」では平叙文の肯定文がどのBookにおいても60～70%を占め、次いで疑問文が20～30%占めている。つまり疑問文とそれに答える文で約9割を占めていることになる。

「(ア) 文2」では命令文があり、「相手の行動を促す働き」のinputもあるといえる。

「(イ) 文の構造」では、主語+動詞、主語+動詞+補語、主語+動詞+目的語のふるまいをする動詞のみならず、getやmakeといった、主語+動詞+目的語+目的語、主語+動詞+目的語+補語など、複

表4 言語の使用場面と働き

		Book 6		Book 5		Book 4		
		場面	文	場面	文	場面	文	
言語の使用場面の例	a 特有の表現がよく使われる場面	あいさつ	1	4	0	0	0	0
		自己紹介	5	28	0	0	5	65
		電話	0	0	0	0	0	0
		買い物	11	32	0	0	0	0
		道案内	11	30	0	0	0	0
		旅行	0	0	6	26	6	16
		食事	0	0	4	9	0	0
	b 生徒の身近な暮らしにかかわる場面	家庭での生活	0	0	18	53	21	53
		学校での学習や活動	18	62	3	5	18	47
		地域の行事	0	0	2	5	0	0
分類不可 (追加事項)		71	224	92	314	67	163	
言語の働きの例	a コミュニケーションを円滑にする		文の数		文の数		文の数	
		呼び掛ける	5		2		10	
		相づちをうつ	5		10		8	
		聞き直す	2		3		0	
	b 気持ちを伝える	繰り返す	0		0		0	
		礼を言う	7		2		10	
		苦情を言う	0		0		0	
		褒める	0		3		0	
		謝る	1		0		2	
	c 情報を伝える	願望 (追加事項)	13		1		8	
		説明する	194		191		142	
		報告する	3		21		10	
		発表する	0		0		0	
	d 考えや意図を伝える	描写する	48		47		26	
		申し出る	0		2		4	
		約束する	0		1		0	
		意見を言う	19		19		17	
		賛成する	3		2		5	
		反対する	2		2		1	
		承諾する	0		0		1	
e 相手の行動を促す	断る	0		0		1		
	質問する	77		92		84		
	依頼する	2		10		1		
	招待する	0		0		3		

表5 文法事項（1文につき1カウント）

		Book 6		Book 5		Book 4		
(ア) 文1	a 文の種類	単文	312	84.30%	375	94.20%	314	96.00%
		重文	12	3.20%	5	1.30%	3	0.90%
		複文	46	12.40%	18	4.50%	10	3.10%
(ア) 文2	b 平叙文	肯定文	240	67.40%	236	59.60%	213	66.40%
		否定文	11	3.10%	32	8.10%	10	3.10%
	c 命令文	肯定文	22	6.20%	33	8.30%	4	1.20%
		否定文	1	0.30%	1	0.30%	0	0.00%
	d 疑問文	80	22.50%	94	23.70%	94	29.30%	
感嘆文	2	0.60%	0	0.00%	0	0.00%		
(イ) 文構造	主語+動詞		82	22.60%	95	23.80%	76	23.50%
	主語+動詞+補語		121	33.30%	124	31.10%	91	28.10%
	主語+動詞+目的語		148	40.80%	177	44.40%	157	48.50%
	主語+動詞+目的語+目的語		12	3.30%	0	0.00%	0	0.00%
	主語+動詞+目的語+補語		0	0.00%	3	0.80%	0	0.00%
(ウ) 代名詞		249		239		262		
(エ) 動詞の時制	現在		226	60.90%	260	65.50%	231	71.10%
	現在完了		36	9.70%	26	6.50%	0	0.00%
	過去		87	23.50%	90	22.70%	47	14.50%
	未来		2	0.50%	21	5.30%	47	14.50%
	仮定法（追加）		20	5.40%	0	0.00%	0	0.00%
(オ) 形容詞及び副詞の比較変化		1		31		23		
(カ) to不定詞		23		8		84		
(キ) 動名詞		6		11		6		
(ク) 現在分詞及び過去分詞の形容詞的用法		27		1		5		
(ケ) 受け身		11		0		0		

(ア)～(エ)の項目においてはさらに分類される項目があるので百分率も併記した。

雑なふるまいをする動詞も含まれていることを示している。

「(エ) 動詞の時制」では、Book 4において現在形が70%を超えた。対して、Book 6では、現在形60%に加え、現在完了形・過去形が30%以上を占め、中学校指導要領に含まれない「願望」を表す仮定法（筆者追加）もあった。

「(オ) 形容詞及び副詞の比較変化」「(カ) to不定詞」「(キ) 動名詞」「(ク) 現在分詞及び過去分詞の形容詞としての用法」「(ケ) 受け身」など、中学校の文法事項としてはやや難解なものも含まれていた。

3.5.3 語彙レベル

分析対象教材の語彙レベルを調査するため、Book 4～6の各unitの最後のsection「Let's Read」（リーディング）をCompleat Lexical Tutor v.8.3（Cobb, 2002）を用いて分析した。平均語数を見ると、各Unitとも80語前後を、学習者は音声を確認しながら読めることが分かる（表6）。

同「Let's Read」のword levelを分析したところ、図1～3の分布が見られた。K1 Wordは1000語レベル、K2 Wordは2000語レベルを表す。

図1～3に示されるとおり、どのBookのどのunit

表6 「Let's Read」 語数

	Book 6	Book 5	Book 4
Unit 1	78	82	54
Unit 2	76	104	79
Unit 3	82	65	63
Unit 4	81	88	64
Unit 5	85	83	58
Unit 6	88	87	83
Unit 7	81	89	91
Unit 8	89	120	94
平均	82.5	89.75	73.25

においてもグラフが同じ分布となっている。つまり、どのunitにおいても、語彙レベルが調整されており、学習者が違和感なく読めるようになっている。全てのunitにおいて1000語レベルが約半数以上を占め、1000語レベルと2000語レベルの語で、どのunitも約80%以上を網羅している。Nation & Waring (1997) によれば、1000語レベルおよび2000語レベルの語彙は、頻出度が非常に高く、書きことばにおいておよそ8割を網羅しているの、1000語2000語レベルの語彙を学習することは、初級段階にある英語学習者にとって非常に有効である。また、全unitにおいて、名詞・動詞・形容詞など単独で意味を表す語である内容語よりも、代名詞・前置詞・冠詞・接続詞など主に文法的な役割が中心となる語である機能語が多くなっている。これは、機能語を多用す

ることで、新出内容語が多くならないようにしているためと考えられる。つまり、学習者にとって未知情報が多くなりすぎるのを防ぐようにしているのである。

さらに、「Let's Read」には、phonics (Book 1～6) と派生語 (Book 5および6) が掲載され、読むことをbottom-upから促進しようとしている。phonicsは、Book 1 & 2で「子音」と「母音」を、Book 3 & 4で「子音+子音」を、Book 5では「黙字の含まれる子音+子音 (+子音)」を、そしてBook 6では「母音+子音」を収録している。特にBook 5と6では、音節 (syllable) における、母音の前の子音 (頭子音) onsetと、母音とその後の音 rhymeに注目させ、学習者が発音と綴り (文字) を関連付けながら読解を進めるためのbottom-up要素が多く含まれている。

また派生語に関しては、Book 5には比較級 (+er) や最上級 (+est) 等、またBook 6には形容詞を名詞にする (形容詞 +ness)、名詞を形容詞にする (名詞 +y) 等が掲載されている。メタ言語の気づきを喚起するように組まれており、新出語彙のように見えても、精査すれば、既知情報から意味を類推することができる力を養成している。

さらに、homework = home+work, sunglasses = sun+glassesなどの複合語の成り立ちも含まれており、派生語同様、新出語彙に出会ったときに既知情報を活用できる力も醸成する意図が伺える。

Book 6

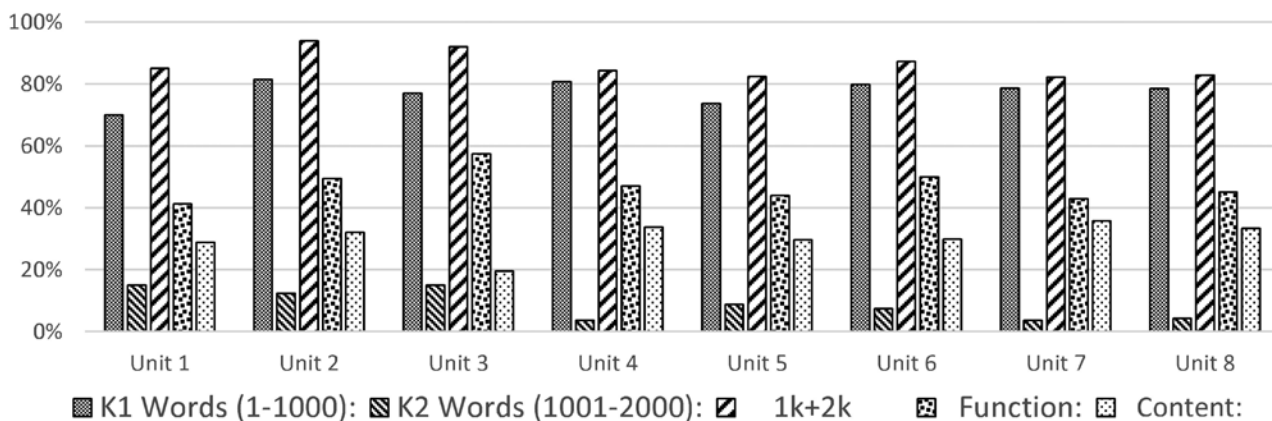


図1 Book 6 「Let's Read」 word level

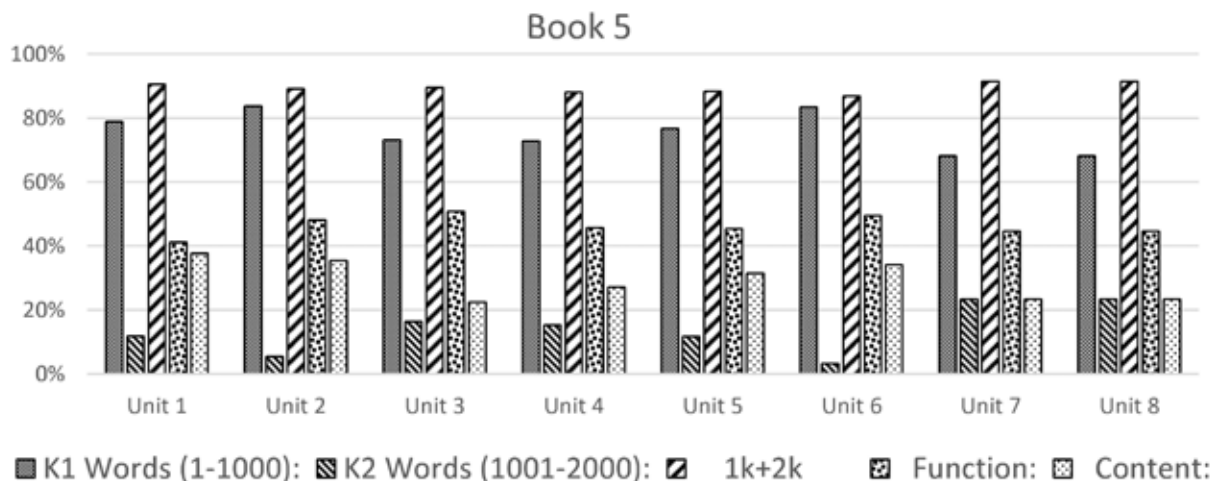


図2 Book 5 [Let's Read] word level

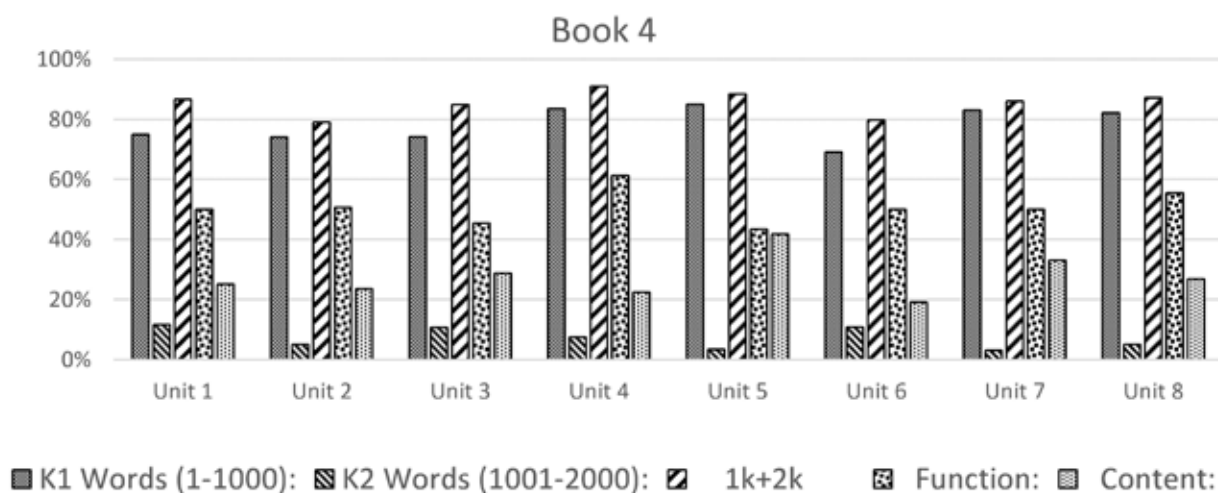


図3 Book 4 [Let's Read] word level

3.6 考察

早期英語教育用に開発されたOxford University Press社『Let's Go』シリーズの機能とコンテンツを分析し、大学生のリメディアル英語教育に適しているか否かについて調査した。

音声については、カレイラ（2008）の研究にある、学生が好む耳で聞きながら目で見ながら学習できるか、という観点から、各セクションにおける音声がついている割合を調査した。その結果、デジタル教材が提供できる音声・文字は、「Let's Talk」において、Book 1と2では6割以上、Book 3～Book 6ではすべてのセクションにおいて提供されていた。

「Let's Learn」「Let's Learn More」では2～5割とBookにより割合が異なったが、「Let's Read」では100%の割合で音声と文字が提供されていた。本教材により、学習者が文字を音声化した学習をすることが可能であると分かる。

テーマに関しては、Book 1～Book 3では学校にcontextが設定されていることが多く、児童向けの印象が否めないが、Book 4～Book 6は、大人用のcommunication用テキストと同様のテーマが多く、大学生にも適していると思われる。

次に、文部科学省調査（2015）、間中（2010）、牧野・平野（2014）の研究から、リメディアルが必要な大

学生には、中学校程度の語彙・文法事項が欠落していると考えられることから、大学生に適したテーマを扱っているBook 4～Book 6に収録されている各sentenceについて、中学校学習指導要領に基づいて分析した。言語の働きでは「質問する」「説明する」などのcommunicationの基本的なやり取りの働きをしているものが多かったが、中には、複文を使用して「意見を言う」表現や、中学校学習指導要領には含まれない「仮定法を用いた願望の表現」も存在しており、多様な働きの言語が収録されていた。さらに、文法事項においては、単文のみならず複文重文や、ふるまいが複雑である目的語を2つ取る動詞、目的語と補語をとる動詞が含まれていた。中学校において重要項目である、比較の文、動詞の過去形や不定詞、分詞の用法や受け身なども含まれており、早期英語教育用ではあるが、かなり文法レベルは高いといえよう。

最後に語彙レベルから分析した結果、第二言語学習者が習得していると有効に活用できる1000語・2000語レベルが、いずれのBookの「Let's Read」にも同じような語数で収録されており、学習者にとってchallengeしやすい教材となっていることが明らかになった。このように語彙レベルが調整されたinputは学習者の基礎的な語彙を積み上げ、定着させるのに役立つものと考えられる。また、phonicsや派生語といった、読みを促進するためのbottom-up要素も多く含まれ、学生が無理なく語彙力を伸長できる仕組みとなっていることが分かった。

4. まとめ

早期英語教育向けデジタル教材であるOxford University Press社『Let's Go』Book 4～6は、デジタル教材ならではの文字を音声化した学習が可能であるだけでなく、汎用性が高いテーマを扱っており、大学生の興味関心を喚起することが可能である。また、中学校学習指導要領の文法事項をほとんど網羅しており、中学校既習事項を再教育できる教材と言えよう。以上より、本教材は大学生のリメディア

ル英語教育に適したものであると考えられる。

参考文献

- Cobb, T. (2002). *Compleat Lexical Tutor v.8.3* [computer program]. Retrieved from <https://www.lextutor.ca/>
- Jones, L. C. (2003). Supporting listening comprehension and vocabulary acquisition with multimedia annotations: The students' voice. *CALICO Journal*, 21, 41-65.
- Jones, T. & Brown, C. (2011). Reading engagement: A comparison between e-books and traditional print books in an elementary classroom. *International Journal of Instruction*, 4, 6-22.
- カレイラ順子 (2008). 「English for Specific Purposes (ESP) を取り入れた英語カリキュラム開発のための学生に対するニーズ調査－保育専攻と心理専攻の類似点及び相違点－」『東京未来大学紀要』第1号
- 國吉丈夫・神保尚武・石田雅近・木村松雄・酒井志延・笹島茂・生内裕子・河内山晶子・染谷泰正・Renée A. Sawazaki・Elizabeth J. Lange・中原淳・小野博 (2005) 「大学生のための英語リメディアル教育e-Learning教材“University Voices”の開発」『メディア教育研究』第2巻第1号
- 牧野眞貴・平野順也 (2014). 「英語リメディアル教育の現状を探る (教員の意識調査から見えてくること)」『リメディアル教育研究』第9巻第2号
- 間中和歌江 (2010). 「基礎レベルの大学生に中学生を指導させる試み」『リメディアル教育研究』第5巻第1号
- 文部科学省 (2015). 「生徒の英語力向上推進プラン」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2015/07/21/1358906_01_1.pdf
- 文部科学省 (2017). 「平成 27 年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daijaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/12/13/1398426_1.pdf
- Mueller, G. (1980). Visual contextual cues and listening comprehension: An experiment. *The Modern Language Journal*, 64, 335-340.
- Nation, P., & Waring, R. (1997). Vocabulary size, text coverage and word lists. In N. Schmitt & M.

- McCarthy (Eds.) , *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy* (pp.6-19) . Cambridge: Cambridge University Press.
- 小野博 (2008) . 「内外のリメディアル教育におけるICTの活用の現状と展望」『メディア教育研究』第5巻第1号, 1-10.
- Oxford, R., & D. Crookall. (1990) . Vocabulary Learning: A Critical Analysis of Techniques. *TESL Canada Journal* 7 (2) , 9-30. Retrieved from <http://www.teslcanadajournal.ca/index.php/tesl/article/viewFile/566/397>
- パクヒョンア (2008) . 「初等デジタル英語教科書活用実態調査」『現代英語教育』9 (3) , 123-151.
- Plass, J. L., Chun, D. M., Mayer, R. E., & Leuther, D. (1998) . Supporting visual and verbal learning preferences in a second language multimedia learning environment. *Journal Educational Psychology*, 90, 25-36.
- Salomon, G. (1983) . The differential investment of mental effort in learning from different sources. *Educational Psychologist*, 18 (1) , 42-50.
- 執行智子 (2012) . 「音のでる絵本を取り入れた中学年のための小学校外国語活動—高学年の外国語活動をスムーズに始めるための準備段階に行なわれるべきこと」 *Step Bulletin Vol. 24*, 2012, 75-85.
- Terrell, T. D. (1986) . Acquisition in the Natural Approach: The Binding/Access Framework. *Modern Language Journal*, 70, 213-227.
- Zucker, T., Moody, A., & McKenna, M. (2009) . The Effects of Electronic Books on Pre-Kindergarten-to-Grade 5 Students' Literacy and Language Outcomes: A Research Synthesis. *Journal of Educational Computing Research*, 40, 47-87.
- (しぎょう ともこ・たくま まさや・
おおしま さち・ふなた まなみ・
かれいら まつぎき じゅんこ)
- 【受理日 2018年10月9日】